

両手を合わせた一直線の境界（大川瀬）

九鬼の殿さん、二つ池を掘って国境や村境が一度に治まり、ほっとしたのもつかの間のこと——。

今度は、播磨国の東条の村々と、三田藩の大川瀬村との山境の論争が持ち上がった。

「お前さんのとこの境、谷一つ、こっちへ来すぎておる。山の峰が境だと、昔から聞いておるのや。」

「いや、ちがう。むしろは、谷川が境と聞いておる。お前さんとここそ、峰一つ、こっちへ来すぎておる。」

というように、しばしば山の境でもめごとがあり、時には、両方にけが人が出たという。

このことを聞いた代官は、直ちに庄屋、年寄、組頭の村方三役を呼び出して言いました。

「よく聞くがよい。我が三田藩は外様、相手の東条の村々は幕府の天領だ。その天領と土地争いをする事は、幕府にはむかうことになる。これが幕府に知れたら、どんなおとがめを受けるかわからない。ただの境の争いではない。大事じゃ。」

さらに、代官は続けて言いました。

「これは、九鬼家の存亡にもかかわる一大事じゃ。どんなことがあっても決して手を出してはならぬ。みんなと心を合わせ、和解の姿勢を見せよ。」

代官の話聞いた庄屋たち三人は、あまりのこの重大さにおどろきました。さっそく村人たちを集め、

「このたびの争論は、大川瀬と東条の村との小競り合いというだけではない。三田の殿さんを巻きこんだ国の争いとなる。たいへんなことなんじゃ。みんな、よくよく考えておくれ。」

と言う年寄が続いて、庄屋も言いました。

「もうすぐ行われる立会いで、わたしの言い分と東条の言うところの間を半分に割って、そこを境にしたらどうか。そうすれば、東条方も聞いてくれるだろうよ。」

すると、古老の一人が言いました。

「庄屋さん、よいお考えだ。どうや、みんな、折半で話し合おう。」

村人たちも納得し、心は一つにまとまったのでした。やがて、立会いの日になりました。

大川瀬の庄屋が東条方に向かって言いました。

「自分の村の言い分を言い張っていては、いつまでたつても収まらない。そこで、あなた方の言うところと、私たちの言い分を合わせて、半分にしたところを境に決めてはいかがでしょう。」

すると、東条方の庄屋が言いました。

「よいことを申されます。私たちも大川瀬の庄屋さんの言われたことと同じことを考えていたのです。」

そして、ふりかえって、

「皆の衆、大川瀬の方は、折半したいと申されているが、どうじゃ。」

と言うと、一同口をそろえて言いました。

「それはよいことだ。大川瀬さんの申されるとおり、折半に賛成です。」

東条方の庄屋は、再び大川瀬方に向かって言いました。

「ご覧の通りです。両方が望んでいたことです。これで、和解いたしましたしょう。」

両者手を打って和解を祝いました。

「東条方のみなさん、ありがとうございます。これで山の境も決まり、双方の心が一つになりました。」

「ありがとうございます。今後とも仲良くしましょう。」

そして、互いの両手を合わせると一直線になることから、二本松の西の端から、東条川の谷を越して小分谷辻の延命地藏までを見通した一直線を村境に決めたという、手打ち一直線の国境のお話しです。

※天領：幕府直轄の領地

